

# 変わる日本の「暮らし」と「まち」

大火を教訓に、災害に強く  
にぎわいのあるまちを再生

新潟県糸魚川市  
(2017年・平成29年)

阿部民子

text by Jamiko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

日本有数のヒスイの産地で知られる新潟県糸魚川市。日本海や北アルプスなどの自然に恵まれ、2009年には日本で初めてユネスコ世界ジオパークにも認定された。そんなまちを大火が襲ったのは2016年12月22日のことだった。白昼10時過ぎに、糸魚川駅北側にある店から出火。火は折からの強風にあおられ、約300m先の日本海に向けてまたたく間に延焼が拡大。古い木造家屋が密集していたことも重なり、まちは2日にわたって燃え続けた。約30時間

後の鎮火までに焼失した面積は約4万㎡、147棟の家屋が焼損するという大火災となった。

甚大な被害をもたらした大火から約1年4カ月経った4月21日。復興が進む被災地の中心部で開かれた「いといがわ復興マルシェ」を訪れた。会場の「にぎわい創出広場」には、名物糸魚川ブラック焼きそばや地元名産の地鶏「鶏」の焼き鳥など、地元人気店をはじめとする約50店が出店。年配者から子供連れまで、多くの人でにぎわった。



まちの中心地に多目的で使用できる広場が開設。ここでマルシェが行われた。

(笑)。「久しぶり」って声をかけてくれる人や、被災された方も『ここに来ると知り合いに会える』って喜んでくださって、うれしいですね」と笑顔を見せる。

友人たちと子供連れで訪れていた糸魚川市の花水美樹さんは「子供の小学校でマルシェのチラシを配っていて、この催しを知りました。大火の後は『がんばろう、糸魚川』ということで、学校でも社会や道徳の時間を使って地域の勉強に力を入れています。火事の前はまちに来て車でも通りすぎるだけだったけど、こういう催しがあると歩いてみようかなって、まちを見直すきっかけにもなりました」と話してくれた。

## まちづくりの助っ人が参上

現在、糸魚川市では2021年度までの5年をかけて、新たなまちづくりが進行中だ。掲げたのは、「災害に強いまち」「にぎわいのあるまち」「住み続けられるまち」の3つの方針だ。

被災地の中心部には準耐火建築物を配って延焼遮断帯を形成するほか、大型防火水槽や用水の利用

で大火を防ぎ、大火に負けないまちづくりを推進。また、転出する人の土地を市が買い取って「にぎわい創出広場」として集約、糸魚川らしい雁木(雪よけのために家の軒から庇を長く出し、下を通路とする建築様式)のまちなみも再生する。復興市営住宅には訪問医療・看護診療所を設ける、といった様々な施策を行っている。

「まちづくりの特徴は、全面的な再開発ではなく、もとあるまちにできるだけ早く戻す修復型まちづくりです」と語るのは、糸魚川市産業部復興推進課の太田亘だ。じつは太田は、糸魚川復興支援のために赴任したURからの出向職員。阪神・淡路大震災や東日本大震災の震災復興事業に携わった経験を活かし、市や地元の人と一丸となって、1日も早い復興へと力を尽くしている。

「赴任したのは大火から約40日後で、ようやく瓦礫が撤去された頃でした。それから約半年の間に、URのノウハウを活かして、被災地全体、街区、個人という3つのレベルできめ細かに合意形成をし、復興計画の策定に取り組みま

した。3月には、まちのシンボルのような蔵元「加賀の井」の酒蔵が再建、老舗の「そば処 泉家」が再開するなど、ようやくまちの姿が見えてきました」

「泉家」の山下晶弘さんは「築80年だった被災前の店の雰囲気を残して再建しました。この地区の準耐火建築物の規制を守ったうえで、景観と防火を両立できるように太田さんを始め市役所の方にはずいぶん相談に乗っていただきました。暗闇に放り出されたような気持ちだっただけに、ありがたかったですね」と振り返る。

## にぎわい創出へ若者も参加

復興に向けて歩むまちでは、新たな動きも始まっている。その一つが、「いといがわ復興マルシェ」だ。イベントを主催した「いといがわ復興マルシェ実行委員会」の横井藍さんは、茨城県で農業を学び、3年前にUターンしてきた20代の若者。父親が経営する農業法人清耕園ファームで、独自ブランド米「ひすいの雫」の栽培やPR活動に励んでいる。

「マルシェは、被災地に足を運ん

でもらいたいとスタートしたので、今日はそれが少し実現できている気がしてうれしいですね。私は糸魚川では何もできないと思って出て行ったんですが、戻ってきた大火に遭い、その後にできた『まちづくりらぼ』という糸魚川のまちづくりを考える団体に参加して、同じ志を持つ同年代の仲間がいつばいできたんです。大火は不幸なことだったけど、それがきっかけで故郷のことを改めて知ることができたとし、糸魚川をすごく好きになりました。これからは、イベントなどを通じて農業のよさや楽しさを伝えていきたいし、都会じゃなくてもやりたいことができると知ってもらいたい。そして、糸魚川をにぎやかにして、帰ってきた若者がやりたいことをバックアップできるようにしたいですね」

はつらつと語る笑顔に、糸魚川の明るい未来が重なり見えてくるようだ。

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社